

インタビュー
コーナー

患者、医療人、職員の選に値する病院
元氣、勇氣、やる気の気の漲る病院
言動、協働、感動の動に満ちた病院
を目指します。



沖縄県立中部病院 院長
宮城 良充 先生

Q1. 院長就任に際して率直な御感想をお聞かせ下さい。

この度平安山英盛先生の後を受けて院長を拝命しました、宮城です。よろしくお願ひいたします。

中部病院に勤務する正職員の中で、とうとう年齢が上から2番目になってしまいました。ここ数年、団塊世代の定年退職が続き、慌ただしくも新世代への転換期であることを実感しております。

知人に「院長就任 おめでとう」と言われると、正直困ってしまいます。というのも、私も団塊世代のまっただ中で、あと2年で定年退職だからです。常日頃から院長は10年やらないと何も成し得ないと思って、公言もしてきました。それが2年ですから、なにをかやいわんやです。そのうえ2年後には、後でも触れます経営形態の選択という重大なイベントがあり、2年で現場を離れる者が無責任に決めることは出来ないとの思いもありました。先輩、同僚、友人に相談すると、一応に院長を受けるべきとは言ってくれるのですが、わずか2年と聞くと、皆さん一応に顔を曇らせるのが明らかでした。どうしようかと思ひあぐねていたところ局長より「伊達に40年間、中部にいたわけではないでしょう。2年と言っても新たな職場に移動し

ての2年とは違う。40年の集大成として引き受けて」と助言され、さらには事務長に「なんやかんや言って、先生は結局敵前逃亡するのか！！」と苦言をいただきました。そこまで言われては引けないと、人事を受け入れることにしました。考え方の視点を変えて“立つ鳥後を濁す”ように、大きくかき回し、完全燃焼することに決意しました。亥年生まれらしく猪突猛進しますので、職員の皆さんにはよろしくお願ひしたいと思ひます。

Q2. 就任早々所信表明をされたそうですが、その内容はどのようなものでしたでしょうか？

院長の所信表明は、今後の目指すべき病院像を具体的に示すものです。従来は「今年度は〇〇を整備します。入院患者を〇%増し、収益を〇%増やします。」といったものに終始していました。所信については思ひ入れがあり、2ヵ月前から準備していました。事の経緯は次の通りです。ある日のこと、事務の方と色々話をしておりました。恐らく病院経営の話であったと思ひます。突然「先生！我々はどこに向かっているのでしょうか。経営云々といわれても、病院の将来像も示されないのに頑張りようがありません！」と訴えられました。ハッとし

ました。まさに天に吐いた唾が我に罹ったのです。なぜなら同じような言葉を自ら県庁に発していたのですから。そこで意を決し、次年度も引き続き管理職になる幹部を集め、合宿し、今後50年間の世界情勢を分析し、これからの中部病院の将来を見定めました。少子高齢化は我々が思っている以上に多方面に影響が大きいことを認識しました。少子は若い労働力不足や年金制度の疲弊をきたし、高齢化はがんの発症率を上げると共にがん対策の整備や独居老人の生活支援など医療に及ぼす影響は大きいものがあり、もはや公的病院として、今までのように急性期みの医療では、地域医療の担い手としては立ちゆかない現実に直面しています。地域連携を進めながら慢性期ケアの視点と実践を併せ持つ事ではじめて、我々の使命を果たせるものと結論しました。紙面の都合もあり詳しくお示しできませんが、上記の考えのもと、今後中部病院が進むべき道を示し、45実施項目について、開始年・達成年を決めて、大まかな行程表を職員に提示しました。

Q3. 経営形態の選択についてお聞かせ下さい。

公立病院改革プランの一貫で、経営形態を変更することにより、経営効率を上げ赤字体質の病院を変えようというものです。沖縄県も経営改革を3年計画で行い、平成23年が最終年で、その成果をもって経営形態を決することが予定されています。南部病院のような民間委譲の例をはじめ、公設公営、公設民営、独立法人化、企業体運営さまざまな場合があります。中部病院は公的病院として現在の役割を同様に果たすことができれば経営形態はいつでも構わないと考えています。ただ現在の機能は、各職員の並々ならぬ努力と献身でなされており、健康や家庭を顧みる事を犠牲にして頑張っている要素も多々あります。経営上好転することは重要な選択ポイントではありますが、公的病院としての機能を果たしつつ、職員が楽しく、やりがいを感じ、健康的な生活を送れるような運営形態を選びたいと思います。そのためにも、院内

でも自ら集めた経営形態の情報・資料を基に職員間で十分に討論をこの1年続けていくことにしています。

Q4. たくさんの経営改革を計画されていますが、その内最も力を入れたいものは何でしょうか？

再三お話していますように、あと2年しかありません。私が後輩たちに何を残し、何を引き継いでいく事ができるのかを、2年前から考えてきました。県立病院の医師は勤続20年～30年の人が多く、県立病院の良いところ悪いところ、得意なこと、苦手なところを知り尽くしています。良いところはさらに伸ばし、悪いところは改善する。それにはどうしても、ひと、もの、金が入用です。ところが医師は患者を診察することは得意でも、それらを手に入れる術には長けていません。そこで事務方の登場となるはずですが、事務職に相談しても、3年でローテーションする人には真剣に聞いて貰えないし、時には余分な仕事はゴメンとのことで積極的に取り組んでくれないことが繰り返されてまいりました。中部病院の医療実績は全国的に知られ、その実力は高く評価されており、さらに事務力が加われば、さらに大きな社会貢献をすることができます。そこで去年から事務総合力アップを様々な仕掛けをして実践しているところです。優秀で強力な事務職を、つぎの後輩に残していくことに最も力を入れていきたいと思っています。

Q5. 県医師会に対するご要望がございましたらお聞かせ下さい。

将来の沖縄県の医療を、社会情勢や財政状況を加味して考えた時、病院の機能分化や再編が、公的施設間、民間施設間、公的・民間施設間、県内・県外施設間において大局的な見地から推進されていくべきであろうと思います。“県民のための医療”を根幹に、次の日本の医療を担う人材育成にも更なる援助をいただき、連携強化を強く押し進めながら県内医療界を牽

引する役割を医師会が担ってもらいたいと思います。

Q6. 最後に日頃の健康法、ご趣味、座右の銘等がございましたらお聞かせ下さい。

学生時代は毎日10kmを走っていたこともあり、40代までは体力に自信がありました。どんなに疲れても1日休めば元気でした。ところが50代後半からは、いままでの蓄えを使い果たし、年末年始は大掃除の後は腰痛で寝正月、運動すると肉離れ、それが治るのに6ヵ月、運動再開すると再び肉離れという悪サイクルに入

ってしまっています。現在は毎朝体重測定し、5キログラム減量をめざして、夜30分ジョグを始めたところですよ。

座右の銘は沢山ありますが、自作の“負怒勝笑”です。～怒るは負け 笑うが勝ち～を唱えながら亥年生まれの猛進型院長への戒めとして毎日仕事をしています。

この度は、インタビューへご回答頂き、誠に有難うございました。

インタビューアー：広報委員 金城 正高

